

3月11日の大震災から4週間たった。

ガレキの山は、依然そこにある。いったい自然の力はどのくらいなのか？わずか数十分で、さっきまで生活を営んでいた町は、跡形もなく破壊されたしまった。私は戦争を知らない世代だが、それを知る世代の人たちは、口をそろえて「まるで空襲の後のようだ」という。

あなたの目でそれを見てほしい。脳裏に焼き付けてほしい。きっとあなたの心の底から優しさが湧き出てくるのがわかる。

ご遺体の検案に通って、4週間目、今日の検案所は東松島市の小野地区体育館。ここ数日、気温が上がってきたせいで、ご遺体の腐敗も進んできた。ここにきて、ご遺族がカルテのコピーを持参で見えることが増えてきた。通っていた歯科医院からもらってきたのだろう。

しかし、今回の津波をとまなう震災では、多くの歯科医院も同時に被害を受け、カルテも流されてしまっているケースが多い。腐敗が進み、顔貌も生前の面影が薄れてきている現在、そしてこれからは、口腔内の照合が決め手となることがもっと多くなるのに、肝心のカルテが無くては照合ができない。われわれの仕事も徒労に終わるのだろうか？

18日から3日間検案を手伝ってくれた重原先生がまたまた来てくれた。この先生の使命感にも頭が下がる。今日は重ちゃんと二人で小野地区体育館で検案。始めようとした矢先に、パーテーションの向こうから雄叫びが上がる。30歳の娘を亡くした母親は、狂ったように泣き叫ぶ。いつまでもいつまでもお棺を叩く音がする。せつない、ああ、せつない！

上がってくるご遺体も一日10体ほどになり、法医学の先生も帰ってしまったので、我々も早々に東松島市を後にした。帰りは、45号線で仙台まで帰ろうということになり、矢本、野蒜、奥松島を通り、松島市を抜け、塩釜市、多賀城市を通り、仙台についた。途中のどの町でも浜浴いや、港浴い、海岸浴いはひどい風景だ。これから先の復興がどうか、全く想像できないほどひどい。

数百メートル流された民家、その窓に突き刺さったままの乗用車、道をふさぐ民家の屋根、20cmを超える堆積した汚泥は匂いもひどい。小さな島が湾内にいくつもある松島は、他の地区に比べると比較的被害が少ない。15mを超えるどんな堤防より、点在した小島は、いい防波堤になっていたようだ。

一方で、平地が続いていた野蒜では、防風林として植えられた松が、本当にこれが根こそぎという状態で数えきれないほど転がっている。この野蒜地区からのご遺体には特徴があった。とても多くの人々の所持品に避難グッズが含まれていたことである。防災無線や津波警報のサイレンをまもり、通帳や印鑑、ラジオや寝袋まで用意して避難していたものの、避難先の高台まであまりに距離があって、行き着くことができずに津波にさらわれて亡くなっている。高台まで続く長く平地が、こんな残酷な結果をもたらした。